

【エントリー情報】

自治体名：兵庫県加東市

学校名（自治体でエントリーされる場合は記載不要です）：加東市立福田小学校

ご記入者：末吉哲大

ご役職：教諭

メールアドレス（※業務用のアドレスをご記入ください）：

電話番号（※業務用の電話番号をご記入ください）：

【設問】

① 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。

（1,500文字以内）※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

加東市の情報教育の今年度の目標は、「教育エビデンスに基づいた『主体的・対話的で深い学び』に向けた授業づくり」です。また、福田小学校の情報教育においては、「ICT 機器を活用して、生活を豊かにする児童を育む」ことを目指しています。コロナ禍の影響もあり、教育現場の ICT 環境は大きく進みました。しかし、それらを「使わなければならないもの」として学習で使っている限り、児童の活用にはつながらないと考えました。それどころか、いたずらにリスクを負わせるだけにもなりかねないと危機感すら感じていました。そこで、学校生活の中で、児童自身が ICT 機器を使用し、その便利さや不便さ、楽しさや恐ろしさを児童自身が感じ、将来的にはリスクを抑えながら、生活を豊かにする活用ができるように育てていくことを目標としました

② 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦勞を教えてください。

（1,500文字以内）

個人のお取り組み

「教育エビデンスに基づいた主体的・対話的で深い学び」ということから、ミライシードの「R-PDCA」を活用しました。5月にアクティブ・ラーニング行動調査を行いました。「あまり当てはまらない」と回答した児童が全体の3割前後になった項目は、「目標決定力（33%）」「学習改善力（44%）」「積極的発言力（28%）」「資料活用引用力（33%）」の4項目でした。この中で、特に汎用性が高いと判断した「目標決定力」「学習改善力」「積極的発言力」の3つの力を伸ばすことを目標に設定しました。以後は、国語科や算数科において、設定した「伸ばしたい力」に応じてカスタマイズされたミライシード授業デザインを参考に、ミライシードを活用した授業実践を進めました。また、それと同時に、週に一回グループ対抗の「ディベート」を行うことにしました。これは、特に担当クラスで課題と感じていた「積極的発言力」へのアプローチとして行いました。

広がり

今回の R-PDCA を用いた学級経営、学習指導の取り組みについて、市の小中各校の情報教育担当者に向けて公開授業を行いました。事後研究会において、取り組みの概要や、アクティブ・ラーニング行動調査の変容について報告しました。今回の取り組みをモデルに、来年度より市の各校において R-PDCA を活用した取り組みが行われることになっています。

課題

3つの力を伸ばすことを目標に取り組んだ結果、10月の2回目のアクティブ・ラーニング行動調査では、3つとも改善された結果を出すことができました。しかし、ほかの今回特に目標としなかった力においては、やや下がったものもありました。目標として注力するのはもちろん大切ですが、ほかの項目においても意識して指導に盛り込んでいくことも大事だと感じました。また、これはあくまで児童による自己評価であるということも忘れてはいけなと感じました。特に少人数の学級では、一人の結果が大きく変化として現れますから、結果の読み取りには注意を要すると思います。当然ですが、アクティブ・ラーニング行動調査だけでなく、担任から見た客観的な児童の実力や課題の見取りも重要だと改めて感じました。児童による自己評価と、担任による客観的な評価の両方を勘案して学級経営のかじ取りをしていこうと意識しました。

③ (3-1) ICT を活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。(2,000文字以内)

R-PDCA を活用して学級経営に生かすことで、これまで経験による漠然とした目標設定を行っていたのが、具体的な数値を基に合理的に判断することができるようになったと思います。また R-PDCA は、基にする指導案や課題が用意されているので、あとは自分のクラスに合うようにカスタマイズして授業を行うことができました。これは、かなりの時短になったと思います。単元全体の方向性も見通せますので、筋の通った計画を立てるのにも役立っています。

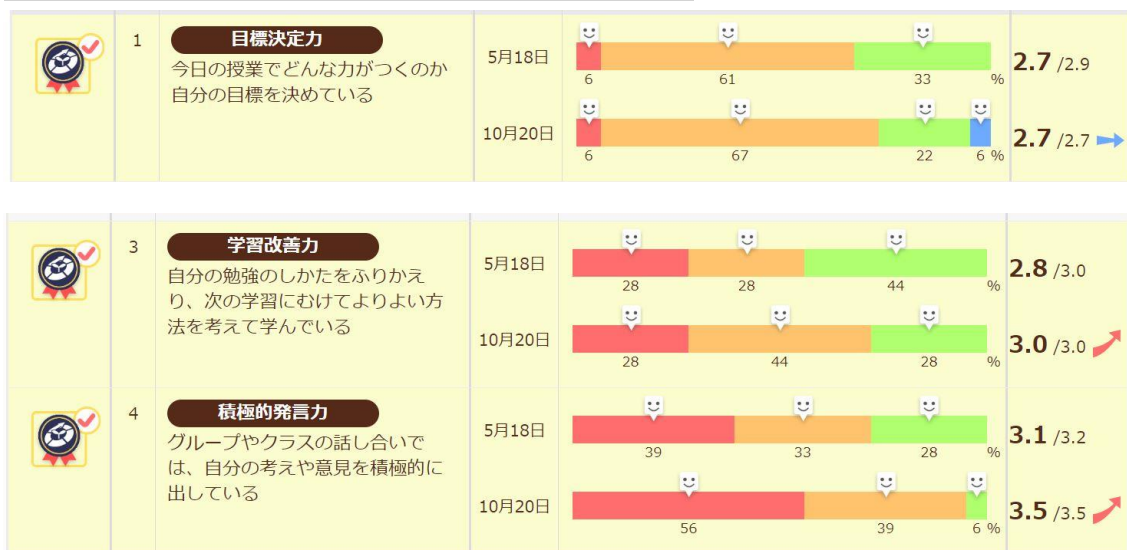
児童は、ICTを使うことで、やはり視覚的にわかりやすく感じているようです。板書による静止的な指導と、ICTによる動的な指導を組み合わせることで、集中も途切れにくいように感じます。また、一人一台のPC端末活用が始まってから、発表の幅が大きく広がりました。それまで発表と言えば、挙手をして大きな声で発言することを指していましたし、作文と言えば、鉛筆で作文用紙に書くものと決まっていました。発言が得意な子もいれば、文章で書く方が得意な子もいます。そのような多様な子がいる中で、タブレット端末があることで、絵で、文章で、録音した声で、動画で、イラストで、あらゆる方法で自分を表現することができるようになりました。あとは、担当する教員が、その多様な場を作り、多様な表現を推奨していくことができれば、子どもたちは安心して、多様に学習を進めていけると思います。それだけの力をタブレット端末は秘めていると思います。

担当クラスでは、作文は、作文帳と Google ドキュメントのどちらでも選べるようにしています。ローマ字入力が苦手な児童は Google ドキュメントで音声入力を活用しています。書字の作文だと、児童が

修正するのが大変なので、あまり細かく修正の指示を出すことに躊躇^{ちゆうちゆう}していたのですが、デジタル化することで修正が容易になり、その分遠慮なく指摘することができるようになりました。「拍手機能」で児童同士で評価をし、拍手の多かった児童に発表させるなど自信をもって発言できるようにすることもあります。

ICT を活用することで、それぞれの苦手には、補助することができるので、使用しない場合に比べて伸ばしたいかにダイレクトに迫れることができることが多くなりました。

(3-2) ICT 活用による成果について、定量的なデータでお示し可能なデータがあれば、教えてください。(1,500 文字以内文字以内) ※本設問のみ任意回答

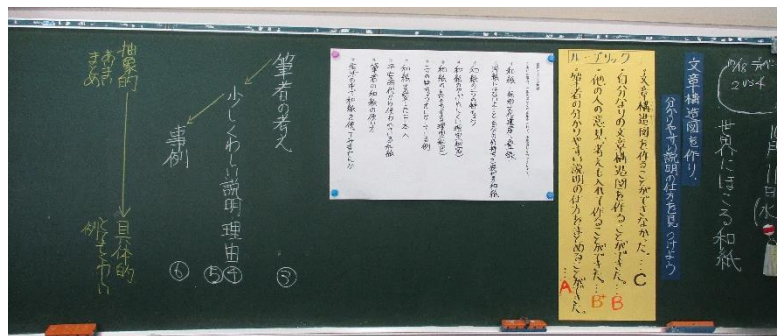


④ お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立つ場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。

※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1 つのエピソードに絞る必要はございません。(2,000 文字以内)

今回の取り組みに当たり、私が最も不安だったのは、R-PDCA の提案授業の質についてでした。こちらの思いと大きく外れていたらどうしようとか、いいものであったとしても、授業の進め方を制限されるのであれば、窮屈^{きゆうくつ}に感じるのではないかとといったことです。しかしそれは、取り組んでいくうちに杞憂^{きゆう}に終わりました。そもそも R-PDCA の提案授業はとてもオーソドックスなもので、また用意されているオクリンクやグループノートのスライドも汎用性が高く、授業の進め方においても、課題の出し方においてもカスタマイズしやすくなっていました。提案される単元全体の流れを眺めながら一つひとつの授業を考えることができましたし、オーソドックスなたたき台があることで、授業の準備時間がかなり短縮されました。

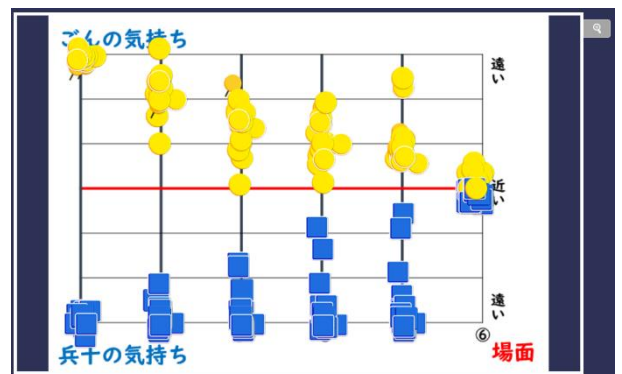
国語の説明文において、フレームリーディングをする際に、各段落の小見出しをもとに文章全体がどのような構造をしているのか考える授業を行いました。その際に、ムーブノートで右図のようなスライドを作成し、段落を抽象から具体的に分けて全体を把握する課題を出しました。子どもたちは、自分の考えで段落のブロックを配置し、それをもとにグループ発表を行いました。



ごんぎつねの学習では、単元のまとめで、ごんはどんな狐であったか総括する際にムーブノートを使用しました。〇〇に入る言葉を児童自身が考えて全体で確認しました。「神様みたいに、見返りを求めずに兵十に優しくしたから『神様ぎつね』だと思ふ」など、多様な意見が出て、授業者としても大変楽しかったのを覚えています。



ごんぎつねでは、ムーブノートのスタンプ機能も役に立ちました。ごんと兵十の気持ちがどのようにつながっていったのか、それぞれで示したスタンプを集計し、スタンプが集中しているところや、みんなとは少し違うところに押した児童それぞれに分けて意見を聞き、交流することができました。



最後は、この冬休みに出した宿題です。ムーブノートを使って、グリーティングカード作りの課題を出しました。子どもたちには、ペンで書いてもいいし、お絵描きソフトで描いたものを貼り付けてもいいし、ネットから取ってきた画像を貼り付けてもいいよと伝えました。その際に、著作権についても触れました。今回は、外に出ないもので、利益も出ないことから自由に使っていいこ

とも伝えています。

このような、子どもたちの「楽しいな」「便利だな」「やってみたい」という気持ちに応えられるのがミライシードのいいところだと思います。

